

弘前女学校における慈善事業

松 本 郁 代

はじめに

現在の弘前学院の歴史を紐解くと、弘前における社会福祉の源流を確認することができる。現在の社会福祉は、慈善事業や救済事業から、それらを組織化する段階を経て、社会事業へと展開し、さらに社会福祉へとつながってくるものとして認識できる。

しかしながら、戦後のものは、存在しているが、弘前市についても、青森県における戦前の社会福祉の歴史についても、まとめられたものが刊行されていない。これまでの単発の論文をみると、子どもの領域について、同じようなものが複数出されており、さらに保健医療との関係や農村セトルメントについて書かれているものなど、いくつかのものに限定されている。

本稿においては、これまでの研究においては、論文において、その事項が触れられる程度であった取り組みで、キリスト教の教会関係者や弘前女学校（名称の変遷がある）を中心としたものについて、とりあげてみる。

弘前女学校⁽¹⁾における慈善事業については、岡山孤児院音楽幻燈隊が、青森県を訪れた際のことについて、かつて取り上げた先行研究が存在している。極論すると、弘前女学校の生徒が、音楽幻燈隊の行進に寄り添って歩いたということが、これらにおいて明らかにされた慈善事業の内容であった。

この中で、王女会が、その役割を担ったことも触れられているが、私立弘前女学校（以下、弘前女学校とする）において、その王女会なるものが、どのような経緯で発足し、どのように変遷したのかについては、明らかにされていない。大きな流れとしては、当時のプロテスタント系の女学校において、王女会も日本基督教矯風会の活動も、その他のボランティアも、同じ女生徒が掛け持ちしているといった状況が報告されており、多忙であることから、それらの統合整理がなされた

ということがあった。

本稿においては、弘前女学校の成立の経緯から、そもそも弘前教会の中に創設された学校であることから、弘前教会との関係を確認することも必要である。慈善事業における各々の取り組みが、教会と学校の協力関係と考えられるものについても言及していく。

先行研究を整理すると、玉井厚・菊池義昭等のものを挙げるができる。しかしながら、これらは、むしろ現在の弘前愛成園開設にまつわる事柄をとりあげており、弘前女学校における慈善事業全体にまつわるものではない。

また、斎藤（2009）による Baucus, Georgiana（以下 ボーカス）による活動の記述も部分的なものとなっている。全体像を把握することは困難であるが、少なくとも宣教師や学校の指導的立場の人たちによる働きが、どのように生徒に影響していたのかを探ることとする。さらに、これらが、その後の慈善事業から社会事業へと進む中で、生徒を取り巻く人たちへ影響を及ぼすのかについて、考察することとしたい。

また、戦後の取り組みを見ることによって、戦前について推測できるようにする。

1 明治期における宣教師による影響

この時期における慈善事業を見ると、弘前女学校と弘前教会との境目が、曖昧といっても過言ではない。ただし、弘前女学校関係者が関わった慈善事業の中には、医療についてのものは、把握できない。このことは、他の地域における、たとえば函館における遺愛女学校においては、市中における医療機関の不備によって、遺愛女学校に赴任した宣教医である Hamisfar, Florence（以下 ハミスファー）による実際の診療活動が、生徒に対しても一般の人に対しても学校内で行われていたという。

しかしながら、こうした事実は、仙台における Schwartz, Herbert Woodworth（以下、シュワルツ）

による仙台基督教教育児院における診療活動と並んで、慈善事業として確認することができるものの、日本においては、医師法の関係で、日本において医師免許を取得した者のみが、診療できることから、何等かの方法によって、例えば、別の医師が処方箋を書くといったやり方で、違法とされない方法をとっていたと考えられる。事実、長崎における De Rotz, Marc M. (以下ド・ロ) 神父による実践がまさしくそのやり方によるものであった (平野 1974 : 560—564) と考えられる。

シュワルツについては、先行研究において弘前における診療活動の有無という点においては、不明であり (藤本 2021 : 87)、ましてや医療ボランティアとなると確認しがたい。ただし、相澤によると弘前において怪我をしたドレーパー夫人のために仙台から自転車に乗って駆け付けたということであるが、それを示す史料が見当たらない (相澤 2023 : 192)。また、弘前女学校においても、その名前が見当たらないことから、外国人に対する治療と仙台キリスト教育児院における被災した子どもたちへの診療活動に終始したということになる。

遺愛女学校においては、生徒の健康管理を宣教師がおこなったということが確認できるが、東奥義塾にその後、赴任してきたシュワルツが行ったということも確認は出来ない。シュワルツについて、『弘前教会五拾年略史』に至っては、教会員の紹介では、日本にいる間の診療活動については、言及されていない。

あえてここで断らなければならないが、これまでのところ、史料の確認ができていないことによって、言及している。裏付ける史料が出てくるとすれば、それは即座に否定されるものである。それを記述することによって、弘前女学校内において、宣教師による医療ボランティアについては、遺愛女学校とは異なり、確認することは出来ない。

尚、来日外国人による医療活動について、かつての研究において、詳細な記述があることを紹介しておく。それは、宗田らによるものである (宗田・蒲原・長門谷ほか 1988)。

慈善事業として、最初の項目に医療活動を取りあげたが、それは宗教の伝道において、他国にお

いても信頼されうる取り組みであって、そのことによって信者を獲得することができると考えられていたからである。また、貧困と疾病の悪循環といわれるように、経験的にも、貧困問題に対応するためには、まず医療活動を行うということがなされてきたからである。しかしながら、来日したメソジスト系の宣教師においては、医師が少なく、その需要がなかったとは言い難いが、日本においては、医制の関係で、医師の存在確認ができていない中では、派遣要請自体が少なく、弘前では、それも確認できないというのが、実態であろう。ちなみに、広瀬 (2015) によっても、弘前から明治期にアメリカ合衆国に渡って医師免許を取得し、医師としての活動をおこなった女性についての研究もなされているが、彼女が地元である弘前に帰還することによって、慈善事業を行ったということは、確認できない。医師がすでに存在していることで、医療宣教は不要と判断された可能性があるが、そのこと自体、問題となる活動ぶりではない。彼女たちは、横浜において活動したことが確認されていることから、地域によって活動の濃淡があったと考えられる。

さて、別の視座からみてみよう。それは、弘前女学校に赴任した女性宣教師のひとりであるボーカスをはじめとする宣教師である。

ボーカスは、自給の宣教師であることから、その活動自体が慈善事業つまりはボランティアとして行われたことになり、報酬を求めたものではない。早々に本学を去り、横浜市山手において出版社である常磐社を開設し、雑誌『常磐』をはじめとする本を出版し、その後、関東大震災で被災して、帰国した人物である。

そもそも、出版社を立ち上げたこと自体は、慈善事業ではないことから、本稿で触れる話ではないが、彼女の目的としては、女学校で教鞭をとっていた時期に、聖書を教えるために、生徒たちに示す適切な日本語の文献が見当たらないということから創設したものであったという (ジョージアナ・ボーカス 1909)。

彼女が、弘前女学校在職中にしていた慈善事業としては次のようなものがある。それは、日露戦争で出征していく兵士に対して、生徒たちとともに慰問の品を手作りするというものであった。ま

た、弘前市内の大火で被災した人たちに対して、見舞金を送るべく周囲の人に働きかけるということであった。

慰問については、戦争協力との捉え方も成立することから、その賛否が問われるものであろう。たしかに、同じ時期に本多庸一も戦地に出向いており、『鳥居坂教会百年史』などでは、同様のコメントが記述されている。事のよし悪しは別のこととして、実態としては、このような動きがあった。

ボーカスの行動自体、どこからヒントを得ていたのかという疑問が出てくる。それは、彼女自身が、来日する前に本国で経験した米西戦争の戦地に向かう兵士たちへの見舞いの方法を持ち込んだものであった。彼女は、その是非について問うことがあったかどうかは定かではない（齋藤 2009）。

2 大正期における慈善事業

この時期をみると、弘前教会を中心として、明確な取り組みを確認できる。それは、本多亡き後の弘前教会の活動ということになるが、大正始めの凶作の際に、その支援のために弘前教会の会員が、複数集まって上京しリンゴを売った資金で被災した人たちを支援したというものである。このことは、複数の文献でとり上げられているところである。しかしながら、東京のどこに販売に行ったのか、それを実証する必要がある。

この当時の弘前教会において、主要な任務をこなしていた山鹿元次郎について書かれた文献においては、「神田三崎町 3-1」となっている（船水 1970：267）。この地は、所番地からみると三崎会館が設置されていたあたりである。宗派こそ違うものの Axling, William（以下 アキスリング）の運営していた三崎会館が設置されていた地域であった。

もうひとつ手がかりとなるのは、伊藤為吉の存在である。彼は、片山潜とともにアメリカ合衆国に留学をし、その後、神田に建築事務所を構え、出獄人を雇って職工軍団を結成していた人物である。出獄人保護所原寄宿舎を開設した原胤昭が、間借りしていたその寄宿舎を独立させる際に、建物を造ったのも伊藤であった。その出獄人保護所

で、事務処理をしていたのが生江孝之であるが⁽²⁾、生江はもともと仙台の出身で、旧制中学の生徒であった時代に、弘前から来た本多庸一に出会い、中学で英語教師をしていたシュワルツの導きで、ハリスから洗礼を受けた人物である。生江は、その後青山学院に入学をするが、経済的な事情から退学を余儀なくされ、その後、シュワルツや本多の支援を受けて、アメリカ合衆国に留学をした。彼は、戦後の社会福祉学の研究者として知られている一番ヶ瀬康子の師匠でもあり、「社会貧」という考え方を示して、貧困論に一石を投じた人物としても知られていることは、周知のごとくである。

尚、シュワルツに日本語の指導をしたのは、本多とともに仙台に来ていた山鹿元次郎である。シュワルツは、1907（明治40）年頃から仙台キリスト教育児院に関わり始め、その後院長を務めており、その間、子どもたちの健康管理を行っている。

シュワルツはその後、弘前教会で二度牧師をし、その間に東奥義塾でも働いていた。

さて、この時期の本題は、凶作に際して、どのような動きがあったのかということである。これは、すでに桜庭駒五郎について書かれた文献や山鹿について記述されたものに出ているが、凶作に際して、弘前教会の会員たちが、先に触れたように、東京で得た資金で凶作で被災した人たちの支援を行ったということである。ちなみに、東京の「神田三崎町 3-1」（高木 1925：95）にリンゴを売る行商団の本部を置き、当時、日本聖書協会に勤務をしていたシュワルツを訪問をするなど、弘前における窮状を伝えたと書かれている。

凶作が起きると、この時期には弘前にチフスが流行り、親を亡くした子どもたちが出て、その子どもたちへの支援として、子どもを里子として引き取るということも行われた。桜庭も例外ではなく、二人の子どもを引き取って育てている。ちなみに、その子どものひとりが、『日本キリスト教歴史大事典』の桜庭駒五郎について記述している。

3 『弘前女学校歴史』から

時期区分に従って順次記述しているということ

ではないが、この文献に登場する慈善事業について紹介してみよう。

この文献は、正確な出版年が奥付には記載されていないが、1925（大正14）年の卒業生名簿が最後に掲載されていることから、それ以降の出版ということになる。また、序言において、新内岩太郎が、山鹿元次郎と分担執筆したと述べている。

その記述において、慈善事業と銘打った記述はなく、代わりに次のような記述が見受けられる。1917（大正6）年の「十月三日矯風会会頭矢島榎子刀自及び守屋東女史來校有益なる講話ありました。」また、1923（大正12）年と読み取れる部分に「賀川豊彦氏來校社会事業と婦人と題し有益なる講演ありました。」と書かれている。これらは、明らかに日本基督教婦人矯風会（以下、矯風会）の重鎮や賀川が弘前女学校に來て講演をしたということである。

矯風会については、弘前支部支部長を高谷とくという弘前女学校の卒業生が務めていた時期もあり、部分的に当時の記録が弘前教会に保存されている。

『弘前女学校歴史』に登場する矯風会初代会頭であった矢島榎子の講演内容が記されていないが、当時の会頭や役員¹の守屋東といった重要人物が、講話として行ったというのである。生徒たちに話したことは、卒業生の高谷とくのように、矯風会の弘前支部を結成して活動した者もあり、在学中から、その活動について教えを受けるということがあった可能性があり、女学生時代に矯風会の慈善事業を行っていたとも考えられる。

たしかに、弘前教会から一本の道を隔てて和徳側には、花街が存在しており、矯風会のメンバーからみると、貧困問題に対してどのように対処するのかということを考えるならば、矯風会についての情報は、有益と判断できるものであったと言える。

矯風会にしても、王女会にしても、女学校の生徒が、実際にどのように関わったのかについては、弘前女学校については、それを伝えるものが散見されないことから、他校で行われていた内容を紹介しておこう。

それは、作家であり翻訳家であった村岡花子について書かれている文献からその内容を知ること

が出来る。少し長いが、次に引用してみよう。

「宣教師たちが学校内のみならず外の貧しい人たちにも目を向けて、孤児院を設立し奉仕する姿勢は、生徒の心の中に社会のために何かに役に立つことをしなければいけないという意識を芽生えさせました。『アンの青春』で、教会で奉仕活動をする大人たちの影響で、アンたち若者が“改善会”を結成し、アヴォンリーの村の美化と健全化に努めたように、生徒たちは王女会や日本基督教婦人矯風会の青年部を組織しました。王女会では、貧困家庭の子どもたちのために学校を作るなどして支援の手を差しのべ、手芸品を製作し、バザーで売り、収益金をさまざまな社会事業施設に寄付したり、宣教師たちの伝道活動に充てました。矯風会青年部では、病院へ花を贈って病人を訪問したり、学校の花壇で花を育て、毎週日曜日に麻布教会に飾る奉仕活動をしました。」（村岡2004：90－91）。

村岡は、王女会にも矯風会の青年部の両方に参加をし、卒業後は矯風会の機関誌にも投稿し活動が続けていた（村岡1921）。

さて、問題は弘前では、どのような活動になっていたのかであるが、その中身については詳らかではない。ただし、他校や他の地域の教会で行われていることについての情報交換がなされていたと考えられる次のことがある。それは、先の村岡の投稿記事と同じ号に、矯風会の中心的メンバーであった林歌子が「北海道より歸りて」として、次のようなものを書いていることによる。

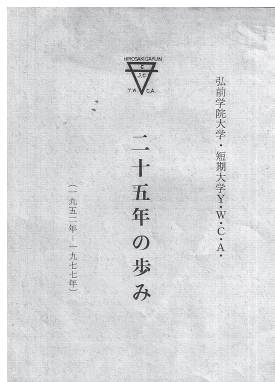
「十一日朝、青森へ着き、白きりボンよ、函館より、室蘭より、津軽海峡を結べよと、弘前へ午前中につきました。支部長高谷夫人方へ迎えられて、午後は其お宅に、夜は本田庸一先生のお家跡に、教会は建てられ」と来弘の報告がなされていることが判る（林1921：30）。

4 YWCAにおける取組

戦前の弘前女学校におけるYWCAの活動については、女性宣教師による年會記録などに登場し、1909（明治42）年には、青山女学院をはじめとして、代表者が神戸女学院に集まって会合を開いたことが判る。

ただ、戦前と戦後のつながりが、資料を見る限

りにおいては、はっきりと判らない。戦後の活動については、右の写真で示した小冊子が1977年に発行されて、まとめられたものが残されているものの、戦前の活動について、いわばその前史を詳細に記述した部分が見当たらないことによる。



戦後の活動については、この小冊子をみると、賀川豊彦による講演会の開催やYWCAの主事を務めていたことのある窪田暁子といった社会福祉学を学んだ経験がある人であれば、だれもが知っている人物が、弘前学院大学・短期大学となつてから、YWCAの活動で弘前を訪れていることが判る。

この冊子では、^{よねざわとし}米沢紀が、弘前学院大学・短期大学となつてからのYWCA25周年の中で、YWCAの活動としては「聖研、拘置所訪問、^{ママ}松ヶ丘訪問、病院伝道などに熱心でクリスマスにはよく施設を訪問したが、(中略)それでも熱心に“新しい人間像を求めて”という当時としては最先端を行く題をかゝって座談会をしたものだった。」(弘前学院YWCA 秋田谷1977:24)と振り返っている。弘前大学のYMCAとの合同集会もおこなったと書かれており、年表をみると1958(昭和33)年8月には「弘前教会青年会と弘大キリスト者・医科連盟共催医療伝道を青森県六ヶ所村を中心に行う YWより二名参加(米沢 紀・石川道子)」(弘前学院YWCA 秋田谷 1977:32)と書かれている。

これを見ると、戦前との連続性は確認できないものの、必要に応じて、医療についても医療行為を行うということは出来ないながらも、YWCAで参加をするといったことが行われていたということである。

このころの学生であった竹岡洋子(卒業後にカトリックのシスターとなった)は、当時の米沢の発言を回想して「愛し、祈り、そして闘え。」と言っていたというのであるが、活動方針はともかく、実際の活動内容は、さらに実践記録を発掘

しなければ、判らない。つまり、戦前と戦後の女学校から短大と発展する中での活動については、その一次史料を発掘することが今後の課題といえる。ただ、戦後については、顧問となった教員が、学生とともに çıkけて活動をしたということが確認できた。

おわりに

以上のように、弘前学院の歴史において組み込まれた慈善事業は、単体で存在していたということではなく、学外の組織とのつながりもあれば、外国からの影響もあつて存在していた。また、慈善事業であることから、誰かに強制されて組み込まれたものではなく、東洋英和のように、教員や周りの大人たちからの影響を受けて行動を起こしたものといえよう。こうした取り組みについては、従来からの研究では、資料の限界と実践についての記録や保存といった問題点が指摘されており、本学においても例外ではないことが判る。今後は、その限界に対して、聞き取りなどを行うことが必要となる。

註

- (1) 現在の弘前学院につながる女学校は、名称変更を繰り返し行っていることから、戦前のものについては、來徳女学校や私立弘前女学校といった名称が正しい時期もあるが、弘前女学校と表現する。
- (2) 生江孝之は、仙台において本多と出会い、シュワルツからの影響もあつて、洗礼を受けたという。経済的事情から、青山学院を中退したことや父親の藩士時代に、その勤務先であった監獄に出向くことがあつて、自然と慈善事業に向かつていったという。

文献

- 相澤文蔵(2003)『津軽を拓いた人々ー津軽の近代化とキリスト教』弘前学院出版会
 青山さゆり会編(1973)『青山女学院史』同会発行
 藤本大士(2021)『医学とキリスト教 日本にお

- けるアメリカ・プロテスタントの医療宣教』法政大学出版局
- 船水 清 (1970) 『ここに人ありき』陸奥新報社
- 林 歌子 (1921) 「北海道より歸りて」『婦人新報』288, 28-30.
- 平野武光編 (1974) 『外海町誌』外海町役場
- 弘前学院大学短大 Y W C A 秋田谷 薫 編 (1977) 『弘前学院 Y W C A 二十五年の歩み 会員名簿 (一九五二年～一九七七年)』
- 広瀬寿秀 (2015) 『津軽人物グラフィティー』北方新社
- 本多 繁 (1991) 『米国のプロテスタンティズムと日本人』明治プロテスタンティズム研究所
- 本多 繁 (1994) 『続・米国のプロテスタンティズムと日本人』明治プロテスタンティズム研究所
- ジャン・W・克蘭メル編 (1996) 『来日メソジスト宣教師事典 1873-1993年』教文館
- ジョージアナ・ボーカス (1909) 「基督教文學」宣教開始五十年記念會委員『開教五十年記念講演集』教文館, 262-271
- 『カナダ婦人宣教師物語』編集委員会編 (2010) 『カナダ婦人宣教師物語』東洋英和女学院
- 間山洋八 (1985) 『基督教棟梁桜庭駒五郎の軌跡』大観堂書店
- Methodist Episcopal Church (1902-1903) “Japan Woman’s Conference. Twentieth Annual Report”
- 村岡花子 (1921) 「騎士の幻」『婦人新報』288 17-20
- 村岡花子 (2004) 『東洋英和女学院創立120周年記念村岡花子随筆集 昔の先生たち』東洋英和女学院同窓会
- 生江孝之先生自叙伝刊行委員会編 (1958) 『生江孝之先生口述 わが九十年の生涯』日本民生文化協会
- 日本キリスト教婦人矯風会編 (1986) 『日本キリスト教婦人矯風会百年史』ドメス出版
- 日本キリスト教歴史大事典編集委員会 (1988) 『日本キリスト教歴史大事典』教文館
- 齋藤元子 (2009) 『女性宣教師の日本探訪記 明治期における米国メソジスト教会の海外伝道』新教出版社
- 仙台キリスト教育児院100年史編纂実行委員会編 (2006) 『仙台キリスト教育児院100年史』社会福祉法人仙台キリスト教育児院
- 宗田 一・蒲原 宏・長門谷洋治ほか (1988) 『医学近代化と来日外国人』世界保健通信社
- 高木武夫編 (1925) 『弘前教会五拾年略史』日本メソジスト弘前教会
- 鳥居坂教会百年史編纂委員会編 (1987) 『鳥居坂教会百年史』日本基督教団鳥居坂教会
- 財団法人中央社會事業協會社會事業研究所 (1937) 『全國社會事業名鑑昭和12年版』同研究所発行